

# 「今魚町宗旨改踏絵帳」調査

## 寄稿

長崎史談会会長 原田博二

付けたりした。それを年末に整理して翌年分の踏絵帳を作成、これを翌年正月の踏み絵の台帳にした。

6月8日、江崎べつ甲店（長崎市魚の町、江崎淑夫社長）所蔵の「今魚町宗旨改踏絵帳」（以下、「踏絵帳」と略）の調査を行った。

その概要是、同9日付の本紙に掲載された。その際、「幕末の長崎画壇の大御所渡辺鶴洲らの名も」とご紹介した。

その後も調査を継続、渡辺鶴洲、さらにはその父秀詮についていろいろと確認することができた。なお、調査に使用したデータは、長崎史談会会員の松江暉子氏、元日本二十六聖人記念館館長のデ・ルカ・レンゾ神父より提供いただいたものである。

毎年年末に作成され、翌年正月の踏み絵で乙名つの監視のもと本人確認が行われた。だから後述するように、踏み絵を踏まないかぎり印鑑が押されることなど、有り得ないのである。

以後、戸籍の原本として使用され、「死」とすると「●」の印が付けられ、出生・転入・転居などの異動は墨や朱で書き込んだり、付箋を

今回の調査の最大の成果は、唐絵目利渡辺秀詮、同鶴洲のそれぞれの生没年、さらには渡辺家の断絶の経緯がわかつたことである。

渡辺秀詮や鶴洲については、長崎学の大冢吉賀十二郎先生の遺稿『長崎画史彙伝』（以下、「画史彙伝」と略）に詳述されている（同遺稿は昭和58年大正堂書店から刊行された）。



今魚町では最も古い延享2年の踏絵帳（江崎べつ甲店所蔵）



天保元年の「踏絵帳」には、「(略)竹森要左衛門借屋歳五拾三 渡邊鶴洲印」とあるので、鶴洲は本宅を売却、この年から妹のはるたどもに竹森の借屋人となつた。名門唐絵目利の格式も誇りも捨て借屋住まいに身を落としたのはやはり一子秀乾の死に絶望したからであろう。

には没年は刻まれていない。  
古賀先生は、「画史彙伝」で、秀詮の没年を89歳、その根拠として元文元（1736）年に生まれたとする石津辰三郎を秀詮の幼名としている（26・27頁）。なお『長崎画人伝』にも秀詮の没年は89歳である。

文政7年の「踏絵帳」には、「渡邊鶴洲」と書かれた貼り紙の下に歳八拾式病死 渡邊自適斎（秀詮のこと）と印」とあり、踏み絵を踏んだ証拠の印鑑があるしかし、同8年以降の踏絵帳には秀詮の名前は一切ない。

ということは、秀詮の没年は82歳で、古賀先生が89歳とするのは誤りだったのである。

### ■息子の病死

鶴洲には、詳細は省略す

るが、離縁した妻との間に秀乾という男子があつた。

鶴洲は、秀乾に期待、将来

を託したが、秀乾はわずか

21歳で病死した。

鶴洲の没年は、渡辺家墓地の鶴洲の墓碑に「天保元

年没と刻まれ、「画史彙伝」にも鶴洲の没年は天保元年、得年は53と記述されている（28頁）。

しかし天保2年の「踏絵帳」には、「略歳五拾四 病死 渡邊鶴洲印」とあり、印鑑があるので、鶴洲は天保2年の踏み絵の日（正月4日）までは確かに存命であった。そして天保2年内に54歳で亡くなつたのである。

### ■借屋住まい

天保元年の「踏絵帳」に

「(略)竹森要左衛門借屋

歳五拾三 渡邊鶴洲印」とあるので、鶴洲は本宅を

売却、この年から妹のはる

たどもに竹森の借屋人とな

つた。名門唐絵目利の格式

も誇りも捨て借屋住まいに

身を落としたのはやはり

一子秀乾の死に絶望した

からであろう。

墓地等を整備、渡辺家の

体面を繕つた鶴洲は翌2

年亡くなつた。残された妹

はるは、以後も竹森の借屋

に住んでいたが56歳にな

った天保13（1842）年長

崎村に転居、以後、渡辺家は

長崎から姿を消すに至つた。

以上のように、「踏絵帳」から秀詮、鶴洲の生没年、さらには渡辺家の断絶の経緯を明らかにすることができた。

この「踏絵帳」にはほかにも唐通事の彭城家や同楊家、さらには魚の町の現在の金鉢の飾（ビードロ細工）を製作した玉屋（丸瀬）一族の名前もみえるので、今後もこれらの家の解明が期待される。